

と申件草子其時不知誰人所進手跡も清輔朝臣乎未委見知即返上訖後經多年奥義集進二條院之時までかたの釋所書加也彼時申旨和讒者又相語候者之間結意趣書此事云云其始作此抄物之時摠字誤多き後撰を見て多書僻事也此事父京兆○祖顯季○存知被傳授者彼時不可注未勘由以往年未勘後日注出非傳授之說之由分明也者庭訓如此大納言○藤原本文まで分明也〔詞延抄〕玄ほひの潟にてまでと云貝を取也俊成卿如此あまのまくかたとは干潟に鹽をまきて鹽をかたくほして焼と云云清輔朝臣說也いづれも隙なくいそがはしきことによめり和泉式部歌にもあまのまくかたとよめり所詮いづれもある事なるべし

〔夫木和歌抄海人〕家集戀歌中

いせのうみのあまのまでがたまで玄ばしうらみに浪のひまはなくとも

〔伊勢紀行〕うらくと過侍るにあまどものしはざさまぐ也沙干にまでと云ものさしとるを見て

いせの海のあまのまでかきまで玄ばし都のつとに我も拾ん

〔拙堂文話〕津城之東爲阿漕浦古歌所云阿古岐島是也其南爲米津浦又其南爲辛洲○中海濱又多竹蠅潮退卽蟄採者以一撮鹽入穴中蠅以爲潮至挺然突出卽捉獲之稍緩則縮入就堀之不見蹤跡○下略

〔星巖乙集〕余性甚嗜蠅又甚嗜蠅偶閱南產志云閩人濱海種蠅又種蠅因竊意本州既已有蠅田則鑿養若余亦得厭飫唯恨其無蠅田耳嗟呼誰居爲燧人氏者必當有人焉

蠅房上市馬蹄圓一箸千枚不值錢自笑貪餓心未足放匙更望有蠅田○註

〔新撰字鏡〕蟲爾志

〔本草和名〕十六蟲魚辛羸子蓋似甲螺而口有蓋似甲香出崔禹

和名於保阿岐